

日本における初期オルテガ思想受容の展開と特質

Early investigation on Ortega's thought in Japan and its characteristics

木下智統

Tomonori KINOSHITA

1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。彼の著作は祖国のみならず、ヨーロッパ、アメリカ大陸、そして日本でも受け入れられた。1933年、日本に彼の思想が導入されて以降、現在に至るまで、数多くの研究論文、研究書等が公表されてきた。その内容は哲学、思想の分野のみならず、政治、社会、文学そして芸術なども含めた多岐にわたっている。これはオルテガが多岐にわたり多彩な知性を発揮した結果であり、また質の高い知性であったことを物語っている。

本論考ではそうした多岐にわたる著作物のうち、1933年から1975年までの期間に発表されたものを対象として、日本におけるオルテガ思想の受容について、その要因と特質に迫ることを目的としている。すでに、拙稿にて1975年までの期間については、オルテガ思想受容の流れについて検討を加えてきたが、本論考では新たにオルテガ思想が導入されてからの期間を四つに分ける試みを行い、最初の二つの期間について先の検討を基にその要因と特質を浮き彫りとすべく考察を行った。ま

た、その際、オルテガ思想導入の出発点についても新たな資料の分析によって得られた事実を加えている。こうした一連の検討により、1975年までの日本におけるオルテガ思想の受容について、その考察に一応の区切りを付けることができるものと考えられる。

2. オルテガ思想受容の四期間

1933年にオルテガ思想が日本に導入されて以降、現在に至るまで彼の思想を対象とした著作、論文、そして雑誌記事等は数多く公表されてきた。また、それらが対象とした学問領域も哲学や社会思想に限ることなく、多岐にわたっている。このような現状を踏まえながら、丹念に資料の分析を進めていくことによって、我が国におけるオルテガ思想受容の要因に迫ることが可能となるだろう。こうした考えの下、これまで分析を進めてきたが作業が進むに連れ、ある程度の期間分けの必要性を感じるようになった。なぜならば、1933年以降から現在までという期間には、戦前、敗戦後の混乱、そして社会体制の変化など、社会環境、学問環境に大きな影響を与えた出来事がいくつも含まれており、オルテガ思想の受容にもそうした出来事が深く関係してい

ることが確認できたためである。

以下、1933年から現在までをそれぞれ節目となる年数を軸にして四つの期間に分け、各期間について簡単な説明を付す。

①第一期（1933年～1955年）

日本におけるオルテガ導入の年から、オルテガがその生涯を終える1955年までの期間。『大衆の反逆』の発刊がこの期間に含まれる。太平洋戦争、敗戦後の混乱など、学問を取り巻く社会環境は厳しいものであったが、こうしたこの期特有の状況が一部の知識人たちをオルテガ思想受容へと向かわせたことが確認できる。

②第二期（1956年～1975年）

オルテガが他界した翌年からマタイスが『ウナムーノ、オルテガ研究』を著した1975年までの期間。この期間では、オルテガの幅広い思想分野のそれぞれに光が当たり始め、オルテガ思想の受容が大きく進展した。また、白水社から刊行された邦訳『オルテガ著作集』の登場は、あらゆる分野の人々にオルテガの思想にふれる機会を与えた。

③第三期（1976年～1992年）

第二期の継続となる1976年から、「スペインイヤー」¹⁾と言われた1992年までの期間。前期と同様、引き続きオルテガ研究は進展を見せるが、特に1992年に至るまでの数年間は過去、類を見ないほどの論文、著書、雑誌記事などが公表され、一般社会に

おいてだけではなく、学術の領域においても大きな盛り上がりを感じる期間となった。

④第四期（1993年～現在）

1993年から現在に至るまでのこの期間には、世紀末、新世紀が含まれるため、20世紀を概観する上でオルテガの大衆社会論が取り上げられるなど、他の期間にはない時間的な特色がある。

では上記の区分に従い、第一期と第二期の各期間におけるオルテガ思想の受容について考察を進めていくが、その前提として思想受容の開始に関する新しい資料の検討を行っておきたい。

3. 日本におけるオルテガ思想受容の開始について

日本におけるオルテガ研究の出発点は、長い間、1936年に桑木巖翼がオルテガの名を「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガッセツト」²⁾と題する論文によって紹介したところに端を発すると思われる。筆者もこれまではこの論文がオルテガ導入の出発点と考え、拙稿にて検討を行っている。しかし、さらなる資料の分析を進めた結果、これは事実と異なることが明らかとなった。第一期オルテガ思想受容について、その特質を浮き彫りとする検討を行う前に、まずはこの点について整理しておきたい。

1991年、立命館大学の教員であった奥村家造³⁾は同大学の「土曜講座」における講演内

1) スペインイヤーとは、コロンブスの「新大陸」到達、またイスラム勢力から国土を回復した年である1492年から500周年目にあたる1992年を指す。この年、スペインではセビリア万博、バルセロナオリンピックが開催され、世界的に大きな注目を浴びた。

2) 本論考の引用に際しては旧仮名遣い、旧字体はそれぞれ新仮名遣い、新字体に改めている。なお、表題については変更を加えていない。

3) 奥村家造。専門は西洋近代思想だが、主としてドイツ哲学に軸を置き、多数の論文、翻訳を残した。1991年に広く一般市民に提供される「土曜講座」で、オルテガが講演の題材として取り上げられたことは、まさにスペインイヤーの影響を思わせる。

容を論文としてまとめ、公刊している。その中で奥村は、日本におけるオルテガ受容の出発点として片山敏彦の論文を、そして最初の翻訳として三好達治の翻訳を取り上げている⁴⁾。では実際にそれぞれの内容について簡単にふれ、その妥当性について確認しておく。

日本における最初のオルテガに関する論文である片山の論文は、「…（オルテガ）は、数年以来数多くの批判的エッセイや哲学的論文によってこの時代の西欧の最も重要な思想家の一人であることを証拠立てた」⁵⁾、という書き出しで始まり、次いで、他者の引用をもってオルテガの紹介がささやかに行われている。その後、オルテガの『現代の課題』において展開されている「世代の概念」について考察を始め、「生の哲学」へと論を進めた。このように、片山の論文は思想家オルテガについての紹介を主としたものではなく、オルテガの哲学に的を絞ったものとなっている。この後に登場する多くの論文、研究書が未だ日本では無名のオルテガについて、その紹介にかなりの労力を費やしたことを考えると、この時期においては珍しい型の論文と言える。また、この時期に発表された論文、研究書の多くには、先の人物紹介に加え、筆者のオルテガに対する心証が述べられていることが多い。だが、この点についても片山の論文は異なっており、彼自身がオルテガに対してどのような印象を持っていたのか、なぜオルテガについて論文を書き記したのか、等については明らかにされていない。

以上、片山の論文についてその内容の確認と同時期の論文、研究書等との簡単な比較を行ってきた。結論として、奥村の指摘のとおり、片山の論文は間違いなくオルテガの哲学

を扱った日本で最初に著された論文であることが確認されたため、今後は1933年を日本におけるオルテガ思想受容の出発点としたい。

続いて、日本における最初のオルテガ著作の翻訳となる、三好の翻訳についても簡単にふれておきたい。三好が翻訳した「額縁」は数ページのエッセイである。翻訳面での日本への最初の導入がエッセイであったことは数限りないエッセイを書き残したオルテガからすればさして不思議ではない。片山の論文と同様、三好の翻訳も長きにわたり、埋もれたものとなってきた。これまで日本における最初のオルテガ著作の翻訳は池島が『現代の課題』を翻訳した、1937年であると考えられてきたが、今回の奥村の指摘により、1933年へと修正が必要となった。また、先の『現代の課題』の翻訳において、池島が翻訳者としてオルテガについて紹介、ならびにオルテガを翻訳した動機について述べているのに対し、この三好の翻訳にはそれらが欠如しており、三好が翻訳に至った真意を知る手がかりが絶たれてしまっている。この点も片山と同じく、残念という他ない。三好の翻訳がエッセイではなく、池島と同じように訳者あとがきを付ける、一冊の書物であれば、日本におけるオルテガ思想受容に新たな一面を加えることが可能となったかもしれない。

4. 第一期オルテガ思想受容について

奥村の指摘によって明らかとなった片山の論文と三好の翻訳について検討を行った結果、オルテガ思想受容の開始は1933年と断定された。ここからは、この1933年からオルテガが他界する1955年までの期間を第一期と定義し、オルテガ思想受容の要因、ならびにこの期間の特質について考察を進めていく。

片山の論文から三年後、オルテガの紹介を意図した桑木の論文が登場し、初期オルテガ

4) 奥村家造「ホセ・オルテガ・イ・ガセと二つの雑誌」, p.114.

5) 片山敏彦「生の歸還の一型式 —オルテガの智の構造への瞥見—」, p.39.

研究の中心人物である池島へとつながっていった。こうして少しずつではあるが、着実にこのスペインの思想家についての出版物は数を伸ばしていった。とは言ってもオルテガが他界する、1955年までの期間、彼の哲学、思想面について研究する人々はまだほんのわずかであった。だが、前にもふれたように、この時期のオルテガ研究者はまだ当時は無名であった、オルテガの紹介に加え、自らがオルテガに接近するようになった契機について、それぞれの出版物で述べていることが多い。そのため、総体数は少ないながらも、個々の心証を丹念に検討することは可能である。では、そうした初期オルテガ研究を推進した人々の資料分析⁶⁾により導き出された受容の要因について、以下の三点を提示する。

第一は、オルテガがドイツで著名な哲学者、思想家としてその名が広まっていたことに強い関心を覚えたことである。日本ではまだ研究が始まったばかりのオルテガであったが、ヨーロッパやアメリカなどではすでにオルテガ哲学について幅広い議論が展開されていた。とりわけ、オルテガが数度の留学を通して、後のオルテガ哲学へとつながる思想基盤を固めたドイツでは、オルテガはスペインの哲学者という位置付けではなく、ヨーロッパの哲学者としてその地位を確立していた。ドイツ哲学が最も重要視されていた当時の日本の学問状況から考えれば、オルテガがドイツで受け入れられている事実こそが日本に導入される上で、最も重要な要因となったのである。

第二は、オルテガが持っていた思想の広がりや文章表現に引きつけられたことである。オルテガは一つの分野に深い見識を示し、論

じたのではなく、多分野についてその知性をいかんなく発揮した。その際、常に基底には彼独自の哲学があったために、評論家としてではなく、思想家、哲学者として人々を魅了したのである。初期オルテガ研究の第一人者であった、池島重信はオルテガが芸術、歴史、心理学などの学問分野に加えて、東洋を含めた各国の文化についても他の追随を許さない次元での理解を持っていたと述べている⁷⁾。だが、こうした思想の広がりも表現手段が乏しくては人々に伝達されることなく、埋もれてしまいかねない。その意味でオルテガが卓越した文章表現能力をも併せ持っていたことは彼の思想を広める上で非常に重要な要素であった。また、オルテガが努めて平易な文章を書いた点も忘れてはならない。なぜなら、オルテガの著作は一部の研究者たちに向けてのみ著されたものではなく、広く一般の人々に向けられたものであった⁸⁾からである。

そして、第三はオルテガが行ったヨーロッパやアメリカなどへの社会批判に日本の研究者たちが共感した点である。オルテガが行った社会批判として、最も代表的なものは彼の主著である、『大衆の反逆』⁹⁾における大衆批判、そして大衆が闊歩する社会への批判である。とりわけ、大衆への批判は強烈に展開されており、また、その対極としてエリートの存在が定義されているために、単なる貴族主

7) 池島重信訳『現代の課題』、p.2.

8) 例えば、オルテガの代表的な著作となった『大衆の反逆』は、元々は新聞の連載として著されたものであった。これは当時、没落状況にあったスペインの復興を果たすべく、オルテガが取り組んだ社会活動の一つである。彼は人々の知的水準を向上させる以外にスペイン再生の道はない、と考えていたために人々が日常、手に取る新聞を利用したのであった。また、同様の志は雑誌『傍観者』にもみることができる。同誌については、西澤龍生訳、『傍観者』内の「訳者あとがき」を参照されたい。

9) 『大衆の反逆』(La rebelión de las masas)という書名については、訳者によっていくつかの表記が存在するが、本論では現在において最も一般的となっている、「大衆の反逆」を用いている。

6) 拙稿、「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察—」におけるオルテガ思想受容の流れを基に分析を行った。

義として誤解されることも少なくはなかった。しかし、哲学を基底に展開されたその主張は、そうした誤解を超えて多くの言語に翻訳され、急速に広まっていった。日本でもドイツ語翻訳版を通してオルテガ思想を研究する人々も現れる一方、1953年には日本語翻訳版が刊行され、これにより日本でも多くの人々がオルテガ思想にふれることが可能となった。そして、ドイツ語翻訳版にせよ、日本語翻訳版にせよ、オルテガの思想にふれた人々は、オルテガの社会分析は何もヨーロッパやアメリカなどに限ったものではなく、日本においても適用されうるものであることに気付かされ、驚き、共感をもったのである。以上のように、オルテガのヨーロッパ、とりわけドイツにおける名声、卓越した文章表現力、そして哲学を土台とした社会分析という三つの要素がオルテガ思想へと人々を引きつけたのである。

次に、この期間の特質について述べておきたい。すでに見てきたように、第一期はオルテガ思想導入の開始時期にあたるため、未だオルテガ研究に携わる者は少なく、また後には見られるような研究領域の広がりもこの段階では限定されたものとなっている。また、敗戦という他の期間には見られない特殊な社会状況は学問環境に暗い影を落とした。だが、こうした状況において、オルテガの思想に少なからぬ影響を受けた知識人の存在が確認できる。そうした中の一人、佐野は混乱した社会状況からいかにして立ち直るかを模索していたのであろう。彼は『大衆の叛逆』における「訳者あとがき」で次のように述べている。

世人はよく「戦後の混乱」と言うが、それは決して一時的な現象ではなく、その禍根は実に深いところにあることをわれわれは本書（『大衆の叛逆』）によって

学び得るだろう。わが国では今日、いたずらに外部からの圧迫に対するレジスタンスの声ばかりが強い。しかし、一民族の生命が容易に外的圧力のみによって奪われ得るものでないことは、歴史がこれを証明している。恐るべきはむしろ内部崩壊であろう。にも拘らず、刻々に内部より崩れつつあるものに対する抵抗の声があまりに希薄なのは何故であるか。しかも、これこそ真に「抵抗」の名に値するものではないか。西欧文明は危機に直面している。しかし、危機のなかにあるのは何も西欧だけではない。そして西欧には、オルテガのような思想の闘士が、少なくともいるのである。この書物の翻訳を思いついたのも、このような自らの反省に資せんがために他ならない¹⁰⁾。

佐野によれば、戦後の混乱という現象は何も敗戦を契機として突如、表出したものではない。それは深い部分において、時間とともに変化し、積み重なり、表面化したととらえていた。この深い部分における変化が指すものこそ、人々の精神に他ならない。つまり、人々の精神が時間をかけて変質していったために、混乱へと結びついたのであり、戦争がその原因ではないのである。オルテガがヨーロッパが迎えている文化的、社会的危機の根本理由として、人々の精神が危機的状況にあることを挙げたのと同様に、佐野もまた、人々の精神にこそ「危機」が生じているととらえたのである。そして、同様の危機に対峙するオルテガに佐野は知識人としての在り方をみたのである。以上のように、敗戦後の混乱した日本という特殊な社会状況に立ち向かおうとする知識人に、オルテガの影響を確認する

10) オルテガ著、佐野利勝訳『大衆の叛逆』、pp.269-270。

ことができた。これは、この期間の重要な特質である。

5. 第二期オルテガ思想受容について

次に、1956年から1975年までの期間を第二期と定義して、第一期で検討した思想受容の要因を踏まえ、どのように受容が進展したのかについて論を進めていく。また、第一期と同様にこの期間の特質についても取り上げて検討する。

第二期は前期と比べ、学問環境に大幅な改善がみられた結果、オルテガ思想を研究する人々の数は一気に増加した。無論、オルテガの思想に魅力を感じる研究者たちが増加したこともその理由であろうが、敗戦の影響が薄らいだことが一番の要因であろう。そうしたことから、論文、著作そして記事などが数多く公表され、日本におけるオルテガ思想の受容が大きく進展した期間となった。また、第一期で進められたことは、主としてオルテガの人物、思想紹介であった。日本において無名の哲学者、しかもそれがスペイン人であったことからすれば、必然であったと言わざるをえない。しかし第二期に入ると、こうした紹介をまったく行わない論文などが登場するようになる。つまり、オルテガ思想について、直線的に考察していく著作物が主流となるのである。このことはオルテガの認知度に大きな変化があったことを意味している。また、そうした著作物が扱う主題もオルテガ思想が持つ、幅広い分野のひとつひとつを考察対象としたものへと細分化されていくことになる。それらは哲学を始めとして多分野へと広がっていく。だが、こうした認知度の変化、研究の専門化、細分化の進展は当時の研究者たちのオルテガに対する心証を探る可能性を小さいものとしてしまった。こうしたことから、第二期では研究の進展を追うことでその

受容の要因の手がかりを探っていくことになる。

それでは第二期のオルテガ思想の受容について、研究面の進展に焦点をあて、最も重要なものをいくつか取り上げる。まず、オルテガが哲学者として認知された点について指摘しておく。すでに、第一期からオルテガを哲学者としてとらえることは珍しいことではなかったが、第二期に入るとオルテガをテーマとした論文¹¹⁾が哲学会の会誌に掲載された。この論文は、哲学者オルテガの存在を日本の哲学研究者たちの間に認知させる大きなきっかけとなった。ドイツ哲学が絶対的な主流派であった日本の哲学界において、スペインの哲学者が登場することは前例のない出来事であった。そのため、この論文は日本のオルテガ研究史において非常に重要な意味を持っている。

次いで、先にみたとおり、この期ではオルテガの哲学についてだけではなく、その他の分野についての研究も進み始めた。それらは例えば、教育学、政治学、社会学、芸術、文学そして歴史学などの分野についてである。このように、いろいろな分野においてオルテガの思想をテーマとした論文が現れ始めたことは、オルテガの幅広い思想のひとつひとつに光が当たり始めたことを意味する。そしてそれはまた、第一期とは比べようもない速度で研究が進展することを可能とした。

最後に、この期に登場し、その後のオルテガ研究に多大な功績を残した人物として、アンセルモ・マタイス¹²⁾についてもふれなくてはならないだろう。日本語が堪能であったマタイスはオルテガに関する論文、著書を日本

11) 原 佑「ホセ・オルテガ・イ・ガセットの思想」。

12) スペイン、マドリッド出身。イエズス会神父として奉仕する傍ら、上智大学で教鞭をとった。『ウナムーノ、オルテガ研究』をはじめとしてオルテガに関する論文、著書を多数、著した。

語で著した。しかも、その内容はスペインでの最新の研究を基にしたものでもあったため、日本のオルテガ研究の水準を一気に引き上げることになった。また、彼が次の世代のオルテガ研究者たちを育てたことも日本のオルテガ研究にとって、見逃せない貢献である¹³⁾。マタイスはこの期間の中心的な研究者であるが、おそらく全期間を通じて、最も日本のオルテガ研究の発展に貢献した研究者であったといえよう。

さて、オルテガ思想受容の進展について取り上げてきたが、最後にこの期の特質について取り上げておきたい。すでにみてきたように、受容の進展こそがこの期を貫くキーワードであった。そのため、第二期において遂げられた顕著な進展をこの期の特質として提示する。まずは、この期間において初めてみられるオルテガの評価を巡るふたつの異なる立場について取り上げておきたい。第一期のオルテガ研究は、実際には研究段階にまでは進展しておらず、主としてオルテガの紹介が中心的な動きであった。そのため、オルテガの評価については好意的なもので占められていた。しかしこれまで見てきたように、本格的な研究が進み始めた第二期では、オルテガの思想面について懐疑的な評価を持つ研究者も現れた。それは先に取り上げた原である。彼は先の論文の書き出しにおいて、「オルテガの形成した思想を、全面的とは言わず、たとえ重点的にせよ展開してみせるということには、様々の困難がともなうであろう¹⁴⁾」と述べ、その理由として、オルテガが扱う考察対象領域が非常に広いものであるが、「彼はその取扱うすべてのものをおのれの個性的な深みで受けとめ、しかもそれらは、論理的に

整合化されて秩序づけられているというより、むしろ微妙な内面的脈絡のうちに保たれながら照応し呼応しあっている¹⁵⁾」との見解を示している。つまり、原によれば、オルテガの思想は彼独自の個性的な深みを基に組み立てられた思想であるがゆえに、万人が理解するための普遍性が認められず、「そこにはいわゆる体系が欠如している¹⁶⁾」との結論に至るといっているのである。しかし、こうした原の見解に対して真正面から対峙するのがマタイスである。先にみたとおり、オルテガ研究の中心人物であるマタイスは、「オルテガの思想は一見してさまざまなテーマについての、多少の差はあれ、直観的な思いつきや考えの集積に見えるが、実は厳密な体系的連関を持っているのである¹⁷⁾」と述べており、この見解が正しいとすれば、原は表面的に「見える」部分だけを基に誤解したことになる。原がどの程度、オルテガ思想の広がりについて理解していたかは定かではない。しかし、原がこのテーマについてこれ以上の検討を行った形跡がないことから、マタイスが展開した幅広く深いオルテガ研究には及ばなかったと推測するしかない。だが、原の言う通り、オルテガが自らの幅広い思想分野を貫く、はっきりとした体系を提示していれば、オルテガに対するより一層の理解が浸透したのではなかろうか。この意味において、原の指摘は価値ある指摘と言えるかもしれない。第二期において、このように相反する主張を行う研究者が現れ始めたことは第一期にはない特質である。

そしてもう一点、挙げておかなければ、オルテガ著作物の翻訳作業が大幅に進展したことであろう。前期には『現代の課題』や『大衆

13) 後にオルテガ研究者となる佐々木孝などが挙げられる。

14) 前掲, p.2.

15) 同上。

16) 同上。

17) マタイス, A. 『ウナムーノ, オルテガの研究』, p.233.

の反逆』といった、オルテガの名著といえる書物にしか翻訳作業が及ばなかったが、第二期では先の名著に加え、細かな随筆に至るまで翻訳が進められた。こうしてオルテガの作品はこの第二期において、一通りの翻訳が完了するのである。そのため、原語では扱うことができなかった人々もこの時期から日本語でオルテガに接することが可能となった¹⁸⁾。この後、『大衆の反逆』は現在に至るまで幾度かの翻訳の再検討が数人の研究者によって行われたが、残る大部分の作品についてはそうした積極的な翻訳活動が行われることはなかった。そのため、オルテガ著作物の翻訳が最も進められた時期という特質をこの期は有している。また、前期の翻訳者たちがオルテガの著作物をドイツ語から日本語に翻訳したのに対して、この期より原語から翻訳を行うことが主流となった点も特質として付け加えておく。

6. 結論に代えて

第一期、第二期と定義してきた、1933年から1975年までの期間について、オルテガ思想受容の要因と特質を明らかとすべく考察を進めてきたが、最後にこの過程で明らかとなった点について指摘を行い本論考の結びとした。

まず、これまで日本におけるオルテガ導入の出発点が事実と異なっていた点を挙げておきたい。すでに見たとおり、これまで出発点とされてきた1936年から3年早まり、1933年をその出発点としてとらえ直すことになった。また、論文だけではなく、最初の翻訳と

なるエッセイの存在も今回の資料分析の過程で浮かび上がった。今後も資料の分析を進め、さらなる変更の可能性を模索していく。

次に、思想導入の期間を四つに分ける試みについてふれておきたい。オルテガ導入の出発点から現在までの期間を分けるというこの試みは、オルテガ思想の受容に社会情勢を関連させてとらえるという視点へとつながった。本論考では戦後の混乱時期において、オルテガの思想が日本の知識人に影響を与えたことを確認したが、オルテガが幅広い分野で受け入れられたことに鑑みれば、こうした視点は今後の分析においても重要となってくるだろう。

そして最後に、第一期と第二期ではその性格に大きな違いがあったことを指摘しておきたい。資料の分析を進めた結果、それぞれの期間では資料内容に大きな違いがあったことが明らかとなった。第一期では、各研究者たちのオルテガ思想受容の要因を検討することが可能であったのに対して、第二期では、そうした心証を示す資料が乏しいために、どのように研究が進展したのかについて論を進めざるをえなかった。このため、それぞれの期間ごとに総括を加えるならば、基本的に第一期はオルテガの紹介にあてられた期間であり、続く第二期は彼の思想研究が進展した期間であったと結論付けることができる。

参考文献

- 原 佑「ホセ・オルテガ・イ・ガセットの思想」『哲学雑誌』71(732), 1956年, pp.1-26.
 オルテガ, J., 三好達治訳「額縁」『思想』135, 1933年, pp.50-57.
 ———, 池島重信訳『現代の課題』刀江書院, 1937年.
 ———, 佐野利勝訳『大衆の叛逆』筑摩書房, 1953年.
 ———, 西澤龍生訳『傍観者』筑摩書房, 1973年.

18) 奥村は先の論文の中で、「そして何よりも喜ばしい出来事は、1969年から翌年にかけて、邦訳『オルテガ著作集』が刊行されたことでありました。これでオルテガについて関心を寄せている人たちに、その思想に近付く門戸が大きく開かれたのであります。少なくとも、私は、その恩恵に浴した一人であります」(p.119)とその意義を述べている。

片山敏彦「生の歸還の一型式 —オルテガの智の構造への瞥見—」『思想』135, 1933年, pp.39-49.

木下智統「日本におけるオルテガ思想の初期受容 —その過程と要因に関する一考察—」『金城学院大学論集』社会科学編9(1), 2012年, pp.130-139.

———「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集』社会科学編9(2), 2013年, pp.94-101.

桑木巖翼「西班牙の思想家ホセ・オルテガ・イ・ガッセット」『丁酉倫理会倫理講演集』403, 1936年, pp.45-64.

マタイス, A., 他著 『ウナムーノ, オルテガの研究』以文社, 1975年.

奥村家造「ホセ・オルテガ・イ・ガセと二つの雑誌」『立命館言語文化研究』3(1), 1991年, pp.101-131.